

東日本大震災に対する日本医科大の対応—千葉北総病院など

(田中宣威ほか、日医大医学会誌 2011; 7(S): 23-34

2018年9月7日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

震災時の医療に関する活動・対応報告を読んだ。

1つ目の対応報告は震災時の千葉北総病院の震災時の対応についてであった。震災時の停電や交通網の破綻などの緊急事態であるからこそ、しっかりと対応をするために対策会議を開き、情報の共有をする必要があるということがわかった。震災などの天災による被害は想像できるレベルを容易く超えることがあるので、いつも以上の冷静さと的確な判断が求められるため、日頃の常識にとらわれないことが必要だとわかった。

2つ目の活動報告は東日本大震災における検案活動についてである。現地での診療などがマスコミに取り上げられる中で、遺体の身元確認と遺族への帰還という人間の死の最後の尊重である検案活動は文明国としてとても大切な作業であるとわかった。また検案する医師だけでなく、効率の良い検案を行うためには、警察との連携や書類発行などを行うサポートスタッフの存在が不可欠である。東日本大震災を災厄とするのではなく、大きな社会改革の1歩とすることが、なくなられた多くの方に報いることになるといえるため、将来の大規模災害に向けて、デジタル化した歯科記録や医療記録の集中的な管理と災害時のデータのスムーズな活用をするためのシステムの構築が求められる。

3つめの活動報告は学生が実際に現地に行き、支援活動を行ったことについてである。医学生だからまだ医療行為を行い貢献することができないから参加しないのではなく、先生達のサポートをすることで被災地の医療に貢献することが出来ることを知り、それに参加することが大切である。運転手や荷物持ち、カルテ整理など裏方の仕事を行うことで、適切に効率よく医療を提供することができる。日本医科大学では今回の被災地支援活動に参加した学生は2名だけであった。今後もっと多くの学生が志願するためにも、支援活動の周知と学生にもできることがあるということを理解する必要がある。

4つ目の活動報告は日本医科大学の学生の東日本大震災支援のための募金活動についてである。義援金を募ることは偽善に思われるなどと考えてしまうのではなく、本当に被災地の復興のためになることは何かを考えて動く必要がある。またいまはネットの力を利用して、Twitterなどで自己発信して募金活動を周知してもらい、自分たちの考えを伝えることも有意義である。できることの大小ではなく、いま自分にできることをしっかり考え行動に移すことが求められる。